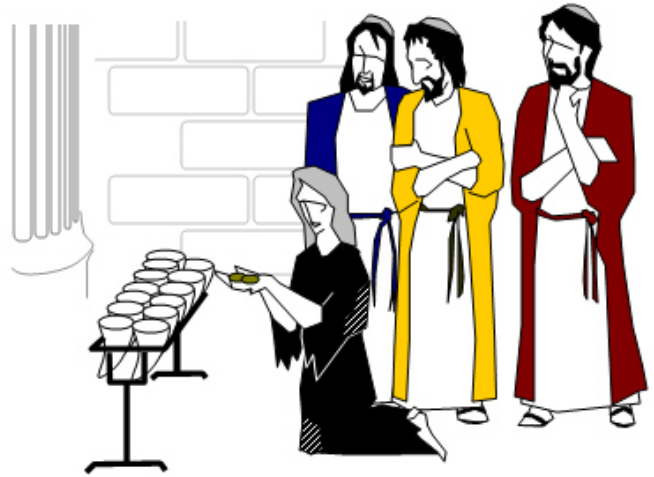


教会暦と聖書の流れ

マルコ福音書では 11 章のはじめでイエスはエルサレムの町に入り、神殿の境内でさまざまな人と出会いました。商売をしている人、祭司長・民の長老・律法学者、ファリサイ派やヘロデ派、サドカイ派という人々です。彼らは当時の社会の中で富や権威を持っている人々でしたが、彼らとイエスとの対立は深まるばかりでした。唯一イエスが評価したのが、最後に出会った一人の貧しい「やもめ」の姿です。イエスはこの後、13 章で神殿を出て行き、その東にあるオリーブ山から神殿を眺めながら、弟子たちに向けて神殿の崩壊を予告し、「決して滅びない」(13 章 31 節)ものへの信頼を説いていくこととなります。

福音のヒント

(1) イエスの時代のエルサレムの神殿には多くの富が集まっていた。そこには祭司やサドカイ派など神殿と結びついた裕福な人々がありました。サドカイ派の中にも律法学者はいましたが、律法学者の多くはファリサイ派に属していました(マルコ 2 章 16 節参照)。ファリサイ派は律法とそれを何世代もの学者が細かく解釈していった「口伝(くでん)律法」を大切にし、厳密に守ろうとした派です。中でも律法に精通していた律法学者は、律法によって民衆を指導していたので、人々の尊敬を集めていました。



(2) イエスの律法学者やファリサイ派の人々に対する数々の批判は、マタイ 23 章 1-36 節やルカ 11 章 39-52 節にも伝えられています。マルコのこの箇所では、イエスは何を批判しているのでしょうか。それは結局のところ、彼らの行動のすべてが「人に見せるため」(マタイ 23 章 5 節参照)だということでしょう。彼らは祈りまでも見せびらかし、自分が人より優位に立つための手段にしてしまっているというのです。

福音書の中でこのような律法学者への批判が語られるとき、それは教会の指導者への警告でもあります。いや、特別な指導者だけでなく、この律法学者の姿は、わたしたち皆の生き方への警告だとも言えるでしょう。自分は人からどう評価されているか、少しでも人から評価されるためにはどうしたらいいか？ わたしたちもそのような思いから完全に自由だとは言えないでしょう。しかし、そこにとどまっている限り本当の意味での神とのつながり、人とのつながりを生きることにはならないのです。

この批判の中には「やもめの家を食べ物にする」(40 節)という言葉が出てきます。これは 41 節以下のやもめの話との関連でマルコが別の伝承から挿入した言葉でしょうか。やもめにとって夫の遺産の相続問題は死活問題だったでしょう。このような遺産相続などのめごとの裁定も律法学者の役割でした。やもめの弱い立場に付け込んで当時の律法学者た

ちは自分の利益を上げていたということなのでしょう。

(3) この律法学者と正反対の立場にいたのが「やもめ = 寡婦(かぶ)」でした。聖書の中で、寡婦は、寄留の他国人や孤児(=みなしご)と並んで、いつも社会的弱者の代表です。

「寄留者を虐待したり、圧迫したりしてはならない。あなたたちはエジプトの国で寄留者であったからである。寡婦や孤児はすべて苦しめてはならない。もし、あなたが彼を苦しめ、彼がわたしに向かって叫ぶ場合は、わたしは必ずその叫びを聞く」(出エジプト記22章20-22節参照)。

寄留者とは、周囲に自分を守ってくれる同胞のいない人々です。孤児は自分を守ってくれる親がいない子どもであり、寡婦は古代の男性中心の社会の中で自分を守ってくれる夫を失った人でした。彼らの後ろ盾は神しかないのです。そしてだからこそ、この人々を大切にすることを律法は要求していたのです。

(4) 当時の神殿の境内には、神殿の建物から一番遠いところに「女性の庭」と呼ばれる部分があって、女性はそれより奥には入れませんでした。この女性の庭にあった賽銭箱(さいせんばこ)は、13個のラッパ型をした雄牛の角(つの)が並んでいたものだったそうです。今回のイラストはその想像図ですが、正確な形はよく分かりません。レプトン銅貨はユダヤの最も小額の貨幣で、その価値は1デナリオンの128分の1でした。1デナリオンは1日の日当と言われていて、その128分の1ですから、今でいえば、せいぜい50円玉1枚ぐらいの価値でしょうか。なお、クアドランスはローマの青銅貨で、1デナリオンの64分の1(1レプトンの倍)にあたります。イエスが賽銭を入れる様子を見ていたというのは、不思議な感じがしますし、なぜ、このやもめの献金が彼女の生活費の全部だと分かったかというのも不思議です。しかし、もちろん、この箇所ではそういうことは問題ではなく、神の前での人間の真実のあり方が問われているのです。

(5) 彼女が賽銭箱に入れたものは「生活費のすべて」(44節)と言われていますが、「生活費」と訳されたギリシア語の「ビオスbios」には「人生」「生活」の意味もあります。

「生活のすべてを神に差し出した」と受け取ることもできるでしょう。

全財産を差し出してしまえば、残るものは何もありません。このやもめの献金はやはり無謀でしょうか？ この日のミサの第一朗読で読まれる列王記上17章の物語も似ています。干ばつの中で預言者エリヤからパン一切れを差し出すように求められたサレプタのやもめは、最後の一握りの小麦粉でパンを作り、それを差し出します。すると「主が地の面(おもて)に雨を降らせる日まで / 壺(つぼ)の粉は尽きることなく / 瓶(かめ)の油はなくなる」(列王記上17章14節)という神の言葉が実現した、という話です。すべてを差し出したところに神の救いの力が働くという体験がわたしたちの中にもあるのでしょうか。

イエスの受難・死・復活の道が、まさにそういう道だったとも言えるでしょう。

神殿で出会った商人や金持ち、社会的・宗教的指導者たちの姿にイエスは心を動かされませんでした。彼らの生き方とイエスの生き方はあまりにもかけ離れていました。イエスが最後に出会ったのがこの貧しい女性です。そしてイエスはこの人の姿以外に、神殿に真実なものは何もなかった、と言うかのように、神殿を後にしていきます(マルコ13章1節)。